大磯丘陵の甲虫類、丹沢と連続性!?

専門家 初の調査で907種確認

秦野・八国見山 霊園開発「大きな影響」と指摘

大規模な霊園開発が始まった秦野市渋沢の八国見山（319㍍）周辺の大磯丘陵に、少なくとも907種の甲虫類が生息していることが、日本甲虫学会会員の斉藤理（おさむ）さん(32)＝横浜市港北区＝のフィールド調査で確認された。標高が高い丹沢・箱根地域の山地でしか発見事例がない甲虫類も数十種確認され、斉藤さんは「八国見山を介してつながる丹沢山地と大磯丘陵の森林環境の連続性をうかがわせる」と分析している。【高橋和夫】

斉藤 理さん

斉藤さんは霊園開発に危機感を持ち、標高の低い大磯丘陵（東西15㌔、南北10㌔）で2013年5月から甲虫類の生息調査を始めた。専門家による大磯丘陵での本格的な甲虫類の調査は初。現在も継続中で、今回は中間報告として結果をまとめた。

報告によると、種名が判明したのは907種。最も多かったハムシ科96種を基に算出した総種類数は1364種と推定された。調査精度などを加味すると、潜在的には1500種を超える甲虫類が生息しているとみられるという。

県レッドデータ生物調査報告書（06年）に登載された数種類も確認された。箱根町と旧津久井町に記録が各1例あるだけのチュウジョウデオキノコムシ、全国的にほとんど記録がないとされるキイロアシボソテントウダマシの絶滅危惧種Ⅰ類の2種を採集。1880年に箱根町・芦ノ湖で記録のあるだけのアカモンチビオオキノコムシも見つかった。

キノコなどの菌類に依存する食菌性甲虫類が豊富なことが八国見山の特徴で、オオキノコムシ類は丹沢山地全体での43種の半数近くに上る21種を確認した。またコナラなど広葉樹の樹液をえさとして好み、県内では津久井・箱根・丹沢地域の山地だけで確認されているハネカクシ類3種も採集した。

県内での平地性甲虫は、箱根火山や富士山噴火による火山灰の降灰や堆積で絶滅した種が多いとされているが、八国見山周辺は険しい地形で火山灰の影響を受けにくかったため、絶滅を免れたとみられる。

大磯丘陵南東部の大磯町まで分布が確認されている山地性の種もおり、斉藤さんは「霊園開発で森林環境が分断されれば、甲虫類にも大きな影響が及ぶ」と指摘している。